

映画と科学

小林 勝

映画は科学に依って生れた芸術である。

したがってその表現はあくまで科学的器物に左右される。例えばカメラ、フィルムなどである。勿論はじめは今日から見れば、それほどすぐれた性能をもつものではなかった。

それにもかかわらず、そうした不完全な器具によって、やがてよい映画が作られるようになったのは、主としてアメリカのグリフィス等の工夫努力によるものであり、それまで無かった新しい大衆芸術を遂に誕生させたのであった。

そしてその新しい芸術表現の理論が、後にソ連の若い映画人たちによって組立てられた。映画の特質は映像表現であり、短いショットの連結によって単一の映像以上の深い意味を持つ点にある。その理論がいわゆるモンタージュと言われるもので、その理論が逆に

今度は映画に新しい別の表現技法をもたせられた。そしてここに無声映画という第七芸術が完成した。だいたい一九二五ころである。

ところが、そこへ科学が再び入り込んで来た。発声装置である。

映画は否応なしに発声しなければならなくなり、全く新しい形式の映像芸術を映画芸術家に強要した。だが映画は難産の未再生しで新しい表現技法を開拓した。科学が入ってくるたびに、映画はその急襲に面くらひ、苦悩し苦闘したが、やがてそれらを自らの栄養として、表現力を拡大して行ったのである。

次に来る色彩映画も、それは全く同じ道筋を歩むこととなる。

スクリーン的大型化が、また同じことの繰

返しである。

もっと小さいことまで教え上げれば、こうした映画に対するチョッカイは数限りなくある。

ここで注意すべきことは、こうした科学の干渉というか参加というか、とにかく科学そのものがひとりに入って来たものではなく、映画資本家が利潤追求のために企らんだものであって、決して映画芸術家が要望したことではなかったということである。あまり世間では注意されていないことであるが、映画製作機構の中では、常に激しい戦いが続けられ、常に新しい産みの苦しみが続けられたのである。表面には現われないことであるから、大衆は何も知らずにこれを映画の進歩発達として喜んで迎えたのである。

この、資本家の利潤追求のために科学を呼び込んだということは、その動機はともかくも、映画というものをだんだんと変形し、新しいメディアにして行ったのであるから、一概に非難することはできない。もともと映画は科学から生れ出たものであるから、科学にいつまでも附きまといわれることは、すでに誕生の日から運命づけられていたのである。

こうした事は今後も起るかも知れないし、

もしかすると、同じような映像文化であるところのテレビ（映画の永年の苦悩をタダで吸い取ったと思われるその表現力）に、吸収し去るかも知れないのである。

このように映画は常に科学に依って変形させられ、それが映画の進歩といういい結果に終ってはいないが、必らずしもそうとはばかりは言えない。立体映画の消滅などはその一つである。放送上映もいつの間にか沙汰やみとなつてしまつた。とにかく利潤の追求という至上命令を行使するのは、いうまでもなく資本組織の側であるが、ここに一つ、全く珍らしいことであるが、映画芸術家による映画表現に貢献する科学的発明があつた。アメリカのカメラマンであるグレッグ・トーランドのパン・フォーカス・レンズである。

このレンズは常に焦点が合っているというレンズで、だいたいカメラは被写体との距離が変れば、焦点が乱れるものである。これをピンボケという。ところが、このレンズを取りつけたカメラは、常に被写体に焦点が合っているから、移動撮影が自由自在となる。

トーランドがこのレンズで撮影した最初の映画は、オーソン・ウェルズが監督した有名な「市民ケイン」（一九四一年）である。

この映画の特徴は、従前の映画のショットに比較して、著しく長いということである。カメラが長々と移動してもピンボケを残さないから、画面は常に鮮明で、しかも自由自在に観客を広大な背景の変化に導いて行く。従来の撮影法では、背景の変化とともにショットを変えなければならなかつた。そのちがひである。

これはいわゆるソ連の映画人たちが理論化したモニタージュ手法を否定することとなる。モニタージュは幾つかのショットをつなぎ合わせ、組立てて独特の映像構成を行ったが、オーソン・ウェルズのやり方は、モニタージュを必要とせず、一つの長いショットの中にモニタージュの意味するものを、易々と表現してしまうのである。

こうした手法の変化は、映画の映像表現に新しい灯をともしたとも言える。アメリカのワイラーや日本の溝口健二も盛んに長い移動ショットを使ったが、それだけ映画の枠が拡大されたと言える。第二次大戦の後に出て来たイタリアの映画には、モニタージュを頭から否定するという少々行きすぎた暴論も現れているが、トーランドの投げた一石が、いろいろの方面に影響を与え、映画の本質を考

え直して見ようという傾向の現れた事は大きな効果であつたと言える。

フランスの新人たちに依つて起つた新しい映画芸術運動、即ちヌーベル・バーグは、こうした機運のもとに映画の内容に向つて発掘が行われ、それが燎原の火の如く世界の映像表現の方法と理論とを塗り変える所まで行つた。そして同時に映画史にも新しい眼が向けられるようになったのは興味深い。

今から十数年前、世界の名ある映画監督一〇〇名による、全映画のベストワン投票が行われた事があるが、それにはモニタージュの教科書と言われているエイゼンシュタインの「戦艦ポチョムキン」とオーソン・ウェルズの「市民ケイン」とが、教年間にわたつて交互に首位に選び出されたことがある。

今日ではそんな事も語り草で、いたずらに刺激の強いスリラーとボルノ映画が横行している。一方古い映画がリヴァイヴアルで迎えられるのも、映画の行きづまりが遂に來たと見るべきか。また何か変つた科学が待望される前兆であらうか。